

## 「財政破綻後の日本経済の姿」に関する研究会 議事録

第2回 2012.7.27 (金)

-----

第2回会合では、事務的な打ち合わせと意見交換・食事を挟んで2つの報告・討議があり、会合は合計6時間に及んだ。

研究会全体に関わるので最初に[打ち合わせ等]について記し、[前半の報告と討議]、[後半の報告と討議]の順に続ける。

### [打ち合わせ等]

研究会の目的と内容、研究の進め方、全体会合の位置づけなどの具体的内容・イメージについては、呼びかけ人の間でもスタート時点で明確だったわけではない。事前の了解に基づいて作成した計画を最終的に承認して WebPage の開設を決定した第2回会合時点では、報告者はもちろんほとんどの参加メンバーにとっても、これらの点に関する理解・イメージは明確ではなく、イメージを共有したわけではない。

「財政破綻後の日本経済」の姿について本格的に考えたこともなく、関連研究等をほとんど目にしたこともない研究会メンバーのほとんどにとって、「破綻後」の姿に関する研究を開始することの重要性については合意したとしても、検討課題の具体的内容と研究方法を明確にイメージし了解することは容易でない。呼びかけ人にとっても状況は大きくは変わらない。試行錯誤を積み重ね、時間をかけて具体化する以外の選択はないと考えていた。

研究会スタート後に「破綻後」の姿について研究課題と方法を具体化して検討を進めるとしても、そのような課題に即した研究会合を開くことは可能でないし、生産的でもない。当初は、現状および「破綻」に至る過程に関わる情報を収集・整理して、「破綻後」の姿に関する検討の基礎を固め準備を整えること、それを通じて「破綻後」の姿に関する検討課題を明確にすること、さらに多岐にわたることが予想される各論点に特化する各メンバーの共通基盤を形成することを会合の中心課題とした。

以上の事情と理由のため、第2回会合（およびそれに続く数回の会合についても同様だろう）の報告者のみならず参加メンバーの多くも、「こんな報告と議論のどの部分がどのように『破綻後』に姿に関わるのか・・・？」という疑問に悩まされるかもしれない。議事録の読者についても同様だろう。

『「財政破綻後の日本経済の姿」に関する研究会の検討課題にとって、『財政問題』『金融問題』が中心だということはない。国民生活・実体経済に対する深刻な影響の内容こそが検討課題の中心になる・・・』と言われ、なんとなくそのように思うとしても、具体的イメージが湧きにくいと困惑する読者のための例示である。こういう類のことがいろいろと起こ

るはずである。もちろん、現時点でそういう事項の網羅的リストを作成できれば、検討もかなり楽になる。

2012年7月25日号のNewsweek誌日本語版は「財政破綻で巨大ゴキブリがナポリを占拠」と題して次の如く報じた。7月上旬に市内の下水道で卵からかえった大量のゴキブリが地上に進出し、今のナポリは巨大なゴキブリの大群に、文字通り占領されている。「政務危機のあおりで清掃局の予算が削減されたため、この1年間は一度も下水の清掃や消毒をしなかったせいだ。」

この研究会は、報告書のようなものの作成を予定していない。のみならず、研究課題および検討方法の選択・設定に関しても、試行錯誤を積み重ねながら明確化し改善していくことを想定している。

### [前半の報告と討議]

午後3時に開始した前半の会合では、財務省財務総合政策研究所の上田淳二氏から「日本の財政に関する長期シミュレーション」と題する報告を受けて討議した。上田氏が本年2月に刊行された『動学的コントロール下の財政政策—社会保障の将来展望』（岩波書店）をベースにした報告である。アメリカの連邦議会予算局(CBO)をはじめとして、各国で政府財政の将来像が策定・公表されてきた。とりわけ近年は「財政破綻」との関連性が強く意識されるようになり、たとえば、「財政破綻に至らないためには、どの程度の規模の財政余剰（財政赤字ではない）を継続的に計上し続けることが必要か？」という視点からの検討が盛んになり、研究者によるものを含め、多くの試算例が公表されている。しかし、日本に関して公表された同様の試算例は多くない。状況が深刻化してしまった現状では、そのような作業の実施・結果の公表には多少の「勇気」が必要かもしれない。膨大な作業に基づく成果を取りまとめた上田氏の最新の書物にわれわれも大いなる関心を抱いた。

学会での報告ではないし、専門的研究者の研究成果としてお話を伺ったのではない。メンバーの多くにもそのような素養・資格があったわけではない。膨大な作業の成果に関して短時間に報告を受けたのであって、研究会の今後の活動の基盤となる財政状況に関するおおまかな基本イメージを得ることを目的とした。

「EUと同様の考え方で、2012年時点で、日本の動学的財政不均衡の大きさを計算した結果は、対GDP比11.3%であった」というのが中心となる結論である。つまり、「財政破綻」を招来しないためには、対GDP比11.3%の財政収支を改善する必要がある（消費税率の10%への引き上げはすでに織り込んでおり、それに加えて、これだけの収支改善の必要がある）。「そりゃあ無理だ……。それじゃあ、破綻は不可避だ」と考える読者が少なくないかもしれない。しかし、そのような判定あるいは予測は上田氏の作業の目的・工程には入っていない。「この数字を公表した後の、周囲あるいは読者の反応はどのようなものでしたか？」という質問に対する上田氏の回答は読者の想像に任せる。三輪も含め、この書物の存在を認知していた参加メンバーが多くはなかったことに状況は象徴されるだろう。

この数字および数字の導き方に対する関心が高まって「財政再建」「財政問題」「財政破綻」「社会保障」などに具体的内容を伴った議論が行われるようになることを想定して、少し情報を提供し、さらに、若干の留意点を記しておこう。

「50年後の債務残高の対GDP比を60%に引き下げるために必要な財政収支改善幅の対GDP比を求める」という問題設定である。債務残高を0にするというものではない。マクロ経済学の標準的なtextbookで紹介されるthe government budget constraintにおおむね沿った検討方法のように見える。毎年巨額の財政赤字を計上し続ける日本政府が、対GDP比11.3%の財政収支改善を行う必要がある、とする。

三輪は、この数字はかなり甘い想定の上で導かれていると考えている。たとえば、今後大幅な上昇が予想される医療費支出の対GDP比が、ここではさほど上昇しないと想定されている。またスタート時点での政府債務残高から年金積立金を差し引き、債務の対GDP比を155%から60%に50年かけて引き下げることが必要とする設定は妥当か？「財政破綻」は「破綻した」と宣言する時点で壁に衝突するようにして現実化するのではなく、いずれ政府の債務返済が滞るだろうと投資家が予想する時点で国債価格下落・金利上昇・政府の資金調達コストの上昇・物価上昇として始まる。だから、40年後に危なくなると投資家が予想すれば、現時点で困難性が現実化する(fiscal theory of the price level)。さらに、次第にそのおそれが高くなれば、割引率が上昇するから、必要な財政余剰の幅が増大する。財政破綻を視野に入れることが少ない従来型の計算枠組みの設定では、このような要因は軽視あるいは無視される。金利上昇は民間経済活動を圧迫して成長率を低下させるかもしれない。政治的な実現可能性に対する投資家の評価も重大な要因となる。

いろいろ気にかかる点がないわけではない。とはいえ、「財政再建」「財政破綻」などの「財政問題」に関わる議論の1つの土台を提示した重要な成果であり、報告依頼に快く応じ、口うるさいメンバーの質問等に我慢強く対応して下さった上田氏に深謝します。

## [後半の報告と討議]

6時開始の後半の会合では、国立社会保障・人口問題研究所の西村周三氏から「財政破綻と社会保障」と題する報告を受けて討議した。

[打ち合わせ等]に記した如き状況下で、依頼した側もおそらくは依頼を受けた側もかなり漠然とした状態のまま報告が計画され、実現したと考えるのが妥当だろう。その点を考慮して、依頼側の何人かの意見を収集して三輪がとりまとめた「各論メモ」をほぼ2週間前にお送りして、適宜選択して可能であれば言及してくださいとお伝えした。しかし、研究会スタート後間もない時点での状況のためもあってほとんど効果はあがらなかった。(参加メンバーにも事前に配布されたこの「各論メモ」についても下記からダウンロード可能。)

用意された「財政再建と社会保障」と題するメモ、および2つの資料に基づいて報告され、議論が行われた。依頼が「年金」に言及して行われたこともあり、年金「問題」の専門家の間で最近話題になっていることが話題の中心となった。このためもあり、なかなか議論

が盛り上がらなかった。議論の内容および議論が盛り上がり欠けた理由等については読者が想像されればよい。とはいえ、「年金問題」に関する研究会メンバーの理解は大いに進んだ。

西村氏が年金よりも医療分野の研究者としてより高名であることに鑑み、途中から「財政破綻」あるいはそのおそれが浮上した時点での医療分野への影響に話題が移行した。供給側を含めて forward-lookingly に対応する経済主体の行動の影響が「財政破綻」の顕在化に先行すると予想しその影響を懸念する三輪のような参加者にとっては意外なほど西村氏（および財政の専門家の多く）の予想は楽観的であった。西村氏には、医療に関わる議論でも今後の研究会の活動に大いに貢献していただいた。

突然のしかも漠然とした内容の依頼を快くお引き受けいただき、当日も散発的かつ雑多な質問等を前にしてなかなかかみ合わない議論に我慢強くお付き合いいただき、さらに予定外の医療に関わる議論にも快く応じていただいた西村氏に深謝します。（文責：三輪芳朗）